

私の登校拒否体験

少年時代に登校拒否をしたことのある校長は、私くらいのものではないだろうか。自慢になることではないが、恥を忍んでその思い出を語ることにしよう。もしかすると最近の親御さんの参考になるかもしれない。

私は五歳の時に母に死に別れた。それまで我々の家族は、北海道の昭和炭山という山奥に住んでいた。雪深く厳寒の地域であるが、冬になると電信柱が雪に埋まり、我々は電線をまたいで歩いた。電線に腰掛けたりぶら下がったりしてはいけないと注意されるほどの豪雪地帯であった。秋には熊も時々出たらしい。妻に死なれた父にとり、この山奥の炭坑は耐えきれない場所であったらしい。思えば父も若かった。彼は当てもないまま炭坑を辞め、「放浪の旅」に出た。おかげで私は、小学校一年の一学期に二回転校を経験することになったのである。

私は積極的な少年であった。何しろ小学校の入学式に、姉が同行するのを待ちきれず、一人で学校へ行ってしまったのだから、積極性もいささか度を超していたのであろう。もっとも「義男が行ってしまったから」というので、そのままほったらかしにした姉も相当なものである。

しかし、一学期の間に二回学校を変わるというのは、それなりに大変なことであった。

最後に落ち着いた小学校一年の七月、私はふとしたことから腎臓炎を患った。夏休みを挟んで相当の期間学校に行くことができなくなったのである。

二学期が始まってしばらくした頃、病も癒え学校に通えるようになった私は、久々のランドセルを背負って、初秋の日をまぶしく感じながら学校へ向かった。

ところが、近所の「八郎ちゃん」が、「小川、お前なんか学校に来るな。おまえが学校に来たって、もう机も腰掛けもないぞ。先生が『小川さんなんて学校に来ない方がいいよね。』って言ったら、みんなが『うん』て言ったぞ」と言うのである。私は驚いた。永いこと学校に行っていないのだから、それは確かに、もう机も腰掛けもないだろうと思った。みんなが来ない方がよいと言ったというのである。私は、学校には行かないことにした。

実は、発病の前、私は掃除当番の班長であった。北海道では「当番長」と言う。それを八郎ちゃんは、私が休んでいる間代わってやってくれていたらしいのである。病み上がりの子供に班長をやらせる先生などいるはずもないのだが、八郎ちゃんも幼いから、その辺の呼吸はわからない。彼は当番長を私に取りかえされると思ったのである。

学校に行けない私は、校舎の裏の草むらに隠れて教室を覗き見る毎日には、正常な学校生活とは別な味わいがあった。

驚いたことに、裏の草むらには、学校を隠れ休みしている仲間が沢山いた。しかも彼らは、「俺は昨日学校に行って来た」とか、「おととい行った」とか言うのである。尋ねると、机も腰掛けもあったという。私は、「俺は机も腰掛けもないから学校に行けないんだ。お前、

昨日行ったんなら、今日も行けばいいじゃないか。どうしていかないんだ。」と、しきりに上級生たちを「善導」した。後年教師になるだけあって、私は「善導する登校拒否児」だったのである。

中には女の子もいた。そのころの「登校拒否グループ」には、後で名の知れたやくぎになった者も少なくなかった、私も危ないところだったのかもしれない。

学校の裏の草むらに誰もいない日もあった。みんな学校に行ってしまったのである。「机も腰掛けもない」私は、行けないのだから寂しかった。ひとりで草むらに隠れていても仕方がない。私は他の場所を探索することにした。

町中をうろついている間に公園に行きついた。それまで私は公園なるものを全く知らなかったから、これはもう夢の国に違いないと思った。滑り台、遊動円木、回旋塔、とにかく沢山の遊び道具がある。田舎育ちの私には、大人がこんないたずらみたいな物を造るはずはないから、これは絶対に夢の国だと思った。おまけに池にはボートまで浮かんでいる。何とすばらしい所であろうか。

農村人口が八割を占めていた時代である。公園で遊んでいる大人などいなかった。小学生が来るはずもない。公園は文字通り私一人が占有できる場所だったのである。

遊園地に連れて行ってもらうことなどほとんどない時代だったが、この隠れ休みしている期間、私は公園の遊具を存分に楽しんだ。おそらく人の一生分くらい楽しんだのではないだろうか。そのためか私は、今でもディズニーランドに行きたいなどとは思わない。偽パスポートを使って我が国の「ディズニーランドを見たかった」どこやらの「ご令息」とは、そもそも幼児体験の総量が違うのである。

雨の日には滑り台の下に雨宿りしたが、少し激しくなるとそうもいかない。そんなときは、池のそばに伏せてあるボートの下に潜りこんだ。時にはそのまま眠りこけてしまうこともあった。

ある日姉が私のノートを調べた。学校に行っていなかったのだから、まっさらである。しかし善良な姉は、弟を疑うことを知らない。先生のおっしゃることや黒板にかかれたことはしっかりノートに書かなければいけないと叱るのである。危機感を感じた私は、毎日滑り台の上で2時間ほど算術の問題を解き、国語の教科書を書き写すことにした。しかし、危機は再び訪れた。こんなに勉強が進む学校はおかしいと姉は言うのである。「そうだよ。僕の学校は勉強が早いんだよ。後で何回もやり直すんだもの。」嘘にはさらに嘘を重ねなければならない。胸は少し痛んだが、何しろ先の見通しなどない年頃だから、急場を切り抜けさえすればよいという有様であった。

困ったことが起きた。だんだん寒くなってきたのである。北海道の10月は、耐え難いほど寒い日もある。だがよくしたもので、その季節になると、駐車場のストーブに火が入った。私は、日がな一日を駅の待合室で過ごすことにした。近くの家のゴミ箱を探すと、沢山の本が捨てられてある。表紙も裏もとれてしまっているものが多いのだが、それでも、アラビアンナイトとかイギリス童話とか、内容の素晴らしいものが少なくなかった。私の知識や話題

に、いささかゴミ箱の臭いらしいものが混じるのは、その時の後遺症である。

線路に入り込み、列車の間をすり抜け、もぐり抜けて遊んだ。台車の下についているハンドルを引くと、シューとエアーの抜ける音がした。50 台以上もある列車のエアーを全部抜いたこともある。しかしこの「優雅な毎日」は、思わぬところで破綻した。列車のいたずらから帰ってみると、何と待合室のベンチの上に置いてあったランドセルがないのである。ランドセルには「タキイチイチノイチ オガワヨシオ」と書いてある。「滝川第1小学校1年1組 小川義男」というわけである。

かくして私の登校拒否体験は悲劇的結末を迎えた。ランドセルが学校に届けられてしまったのである。

私は裸にされて松の木に縛り付けられた。息子が何よりの自慢であった父にとり、それはどれほど悲しいことであっただろうか。

父は人通りが途絶えた頃、裸の私に腰縄をつけて「石狩川に漬ける」ため歩かせ始めた。「漬ける」とはどんなことか分からなかったが、恐怖に怯えた私は、「助けて」と叫んだ。近所のおばさんたちが出てきて、泣くようにして謝ってくれた。「よしおちゃん、もうしないよね。」と。

「昔の先生はよかった」などという人がよくいるが、私はそうでもないと思う。転校してきた1年生が、2か月も学校を隠れ休みしているのに、情報が入らないはずがない。しかし担任は、家庭訪問はおろか、手紙一本家に出さなかったのである。

「今の先生は良くない」という人が多い。そうかも知れない。しかし私は確信を持って言うが、1週間子供が学校に来なくて、何らかの動きを起こさぬ教師は、今の学校には絶対にはいない。

私はその後さぼらず学校に通い、まあまあ真面目な大人に育った。ずいぶん悲しい体験ではあるが、それも教師となった今では、貴重な体験だったと思う。非行に走った生徒に対して、彼あるいは彼女と、実は仲間であるという実感が、私の心のどこかには隠れているからである。

「ばれた」後、学校に呼び出された父は、担任に、「先生、こんな子は石川五右衛門のようになるのではないのでしょうか。」と尋ねた。先生は、「そうでもないですよ。」と答えたという。父は、私をひっぱたきながら、先生その言葉を繰り返した。「石川五右衛門のようになるのではないのでしょうか、と言ったら先生は、そうでもないですよと言った。」と何度も何度も繰り返すのである。20歳を過ぎたか過ぎないの娘っこ教師の言うことである。当てになどなるものか。しかし父は、せめてもの救いをその言葉に求めたのか、「そうでもないですよと言った」と、呪文のように繰り返しながら私を殴るのである。

新任教師を対象とする講演などの際には私は、しばしばこのことを語るなのであるが、語るたびに、つい涙にむせびそうになってしまうのである。